

# NEWSLETTER

No.4

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会報 第4号

(2005年2月)

- 内容 会長になって (市川敏弘)  
海外派遣のあとに“地元にも派遣”されてみませんか? (大富 潤)  
国際協力の想い出 (根建心具)  
地球市民フォーラムに参加して (望月秀郎)  
平成15年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会報告 (北 香理)  
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

## 会長になって

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 市川敏弘

昨年4月に野田伸一会長の後任として会長になってしまいました。私は昼食のメニューなどどちらでもいいようなことは決断が遅いのに、重要な問題を即決することがあります。会長の件もなにも考えず即決しましたが、実は総会の議論を聞きながら不安が高まり軽い気持ちで引き受けたことを反省し、そのため懇親会ではリラックスできませんでした。どなたも私より会の活動に熱意があると感じたからです。私は通算して3年8ヶ月ほど派遣専門家(マレーシア)の経験はありますが、この会の運営に関してはこれまで何の貢献もしていません。幸い前幹事4名の方に全員留任していただき、また前会長には事務局として外部との連絡をお願いしたり会議の場所を提供していただけることになりました。こうしたベテランの方に支えられて1年が過ぎようとしています。

さて、今年度はこれまでの路線を引き継ぐことを活動方針としてきましたが、次年度もまた同様の方針でさらに活動を充実させたいと思います。具体的には、「会員の経験を活用してもらう事業」を活発化することや「他の団体との関係」を深めることなどがあげられます。特に、会員の経験を県内で活用することは連絡会の申し合わせ事項に趣旨として書かれています。この「経験活用事業」

は前会長の時に準備され今年度から実行されました。その過程については、昨年度の総会および活動報告で北幹事から詳しく説明されています。今年度は3件の講師派遣の要請があり、大富潤幹事(鹿児島大学水産学部)と中畑勝見会員(鹿児島水族館)それに東香代子会員(生協病院)に対応していただきました。派遣先はいずれも中学あるいは高校です。この事業の対象は学校とはかぎりませんが、小中学生や高校生に私たちの経験を伝えることは特別な意義があると思います。少し時間はかかるでしょうが、国際協力に貢献する人材を鹿児島県から育てる最も確実な方法だからです。

この事業に関しては実行委員会が組織され児玉幹事に委員長をお願いしました。各自多忙なため委員会を開くことすら容易ではありませんし、宣伝方法、旅費等いろいろな問題があります。また現在国際交流推進員に連絡の窓口をお願いしていますが、負担が大きくなるようでしたら別の方法を考えなければなりません。このように試行錯誤の状態ですが、私はこの事業は会の活動の核になる重要なものだと信じています。

以上新会長の挨拶としては頼りないものになりました。しかしご安心下さい。現在幹事のチーム

ワークはとて面白いし国際協力推進員との関係も  
うまくいっています。地元の期待もますます大き

くなるでしょう。より充実した活動に向けて会員  
の皆様のご協力をお願いいたします。

## 海外派遣のあとに“地元にも派遣”されてみませんか？

鹿児島大学水産学部 大富 潤

先日は長い時間にわたって私の話を聞いてくれ  
て、また、お礼の手紙や班ごとのまとめを送っ  
てくれてありがとうございました。

「鹿児島に生まれ鹿児島に住んでいると、地元  
の良さが気がつかないかもしれない。」このこと  
を実感してくれたでしょうか？ 皆さんの住む鹿  
児島には、他にはない宝物がいっぱいです。とて  
も深い鹿児島湾にはまだまだ未知の生物がいま  
す。八代海にはとてもきれいな干潟が残っていま  
す。また、そんな海に深くかかわって生活をして  
いる漁師さんたちがいます。おいしく安全で世界  
にはばたくブリを育てる人たちがいます。皆さん  
にとっては「あたりまえ」のことが、実は他では  
できないすごいことだったりするのです。そのこ  
とは、皆さんが学校を卒業して、日本の他の場所  
や外国での生活を経験すると強く実感できること  
です。私はマレーシアに行ってマレーシアの良い  
所をたくさん見ましたが、同時に日本のすばらし  
い所も再発見できました。皆さんもどうか自分の  
目で、耳で、手で、足で外のいろんな世界を体験  
してみてください。そして、将来はぜひ鹿児島に  
帰ってきてください。鹿児島は世界に誇れる場所  
ですよ！

それから、授業のあとにまとめてくれたナミク  
ダヒゲエビやタギリカクレエビ、マレー語やドリ  
アンのことを、これからもどうか忘れないでくだ  
さい。授業でも言いましたが、「今がんばること」  
よりも「持続すること」が大切ですよ！

質問への答え。①ナミクダヒゲエビは食べられ  
るの？…。もちろんです！ 生食、てんぼら、塩  
焼き、…、とてもおいしいエビなのでぜひ食べて  
ください。②ナミクダヒゲエビの盛漁期は？…。  
禁漁明けの7月にたくさん捕れるので夏が盛漁  
期とも考えられます。ただし、味は一年中変わら  
ずおいしいですよ。③鹿児島大学水産学部には入  
りやすいの？…。努力次第では簡単に入ることが  
できます。ただし、大学に「入ること」が人生の

目的のように考える人が多いですが、本当は大学  
に入ってから「いかに学び、いかに遊ぶか」が人  
生を左右します。私の授業を聴いてくれた皆さん  
には、おおいに期待しています。

今回、鷹巣中学校を訪れたのは初めてでし  
たが、校庭やろうかですれちがう生徒諸君がみんな  
あいさつをしてくれたことがとてもうれしかった  
です。大学生でも、大人でもきちんとあいさつが  
できない人が多い時代ですが、鷹巣中学校はとて  
も礼儀正しい生徒ばかりのすばらしい学校だとい  
う印象が強く残りました。また、授業中は私語が  
ほとんどなく、そうかと思うと質問に対してはハ  
キハキと答える皆さんの姿も印象的でした。でき  
ればまた行きたいなあと思いました。これからも  
笑顔を絶やさず快活にがんばってください。それ  
ぞれの良いところをうんと伸ばしてください。本  
当に期待していますよ！ では、また会いましょ  
う。

上の稚拙な文章は、私が鹿児島県東町立鷹巣中  
学校の生徒たちに宛てた手紙（一部省略）です。  
「総合的な学習の時間」で「郷土と国際理解」を  
テーマとした授業を担当させていただいたあと、  
生徒たちから質問やお礼の手紙が届きました。そ  
の返事です。

このたび、鹿児島県JICA派遣専門家連絡会  
では、会員の海外での経験を一般市民に活用してい  
ただこうと考え、「JICA専門家経験者の講師派遣  
や執筆のご要望にお応えします！」という活動が  
始まりました。初年度第1号の依頼は、鷹巣中  
学校から。「総合的な学習の時間」で「漁業、農業、  
橋など、地域（東町）の特徴となるものが外国で  
はどのように扱われているのかを知り、外国の文  
化とともに自らの郷土を見直す機会」を生徒たち  
に与えて欲しいというものでした。なんと、JICA  
の専門家としてはマレーシアにたった2ヵ月弱の  
滞在経験しかない私に白羽の矢が！ 外国のこと  
に関して話す自信は全くありませんでしたが、

小・中学生対象の講演は大好きな私。躊躇はしましたが、お引き受けすることにしました。

与えられた授業は2コマ。前半では「鹿児島湾深海底の生物を追って」と題し、地元の海、鹿児島湾がいかに謎に満ちた海であるか、海底に棲息するナミクダヒゲエビがいかにおもしろい生き物であるかなどといった話、また私たちが行っている種子島沖のサメ調査や鹿児島湾の水産資源研究の紹介などをしました。東町といえば水産業の町。将来の水産業を担う精鋭予備軍たちへの授業は、私にとってもとてもスリリングでした。しかし、私の海の話は彼らにとっても新鮮だったようで、内心“やったぜ！”という感じでした。後半はマレーシアについて。マレーシアの自然、マングローブや魚、フルーツについて、それに、一見自然がいっぱいだと思う緑の光景の中にも見えない自然破壊が起きている、といったような話。授業終了の挨拶はマレー語でかわしました。「テリマカシ」「サマサマ」「オランウータン」…？

私はふだんの大学での授業もそうですが、なるべく一方通行の授業にならないように心がけています。このときも、こちらから生徒たちにどんどん質問を投げかけました。ハキハキと答える子、恥ずかしそうにする子、一生懸命考えて答える子…。うまく答えられるかどうか、担任の先生が横でハラハラしているのがわかりました。(みんなそれぞれ良いところがある。大丈夫ですよ！)

たった数時間の授業でしたが、この子はリーダー格、この子は内に秘めるものを持っている、など、それぞれのキャラクターがわかってくるものです。これが、話をする側にとっていちばん嬉しいことです。

会員の海外での経験を一般市民に活用していただくというこの活動は、講演ではなく執筆というかたちでもいいわけです。また、対象は小・中学生に限らず、大人のサークル、公民館での集会、企業の研修など、あるいは幼稚園児や保育園児。あらゆる方々のご要望にお応えしていこうというものです。派遣先の海外での経験は、相手国への技術供与だけではなく、専門家にとっての宝物でもあるはず。その宝物を私たちの地元伝える意義は大きいと思います。「専門家と海外」ではなく、専門家を通じて地元と海外をつなぐことこそが国際交流であり、国際貢献でもあるのではないのでしょうか。私たちが海外の魅力にとりつかれたように、海外に興味がある人はたくさんいます。海外のみならず、“地元への派遣”もいいものですよ！

なによりも、この活動は私たち会員が一般市民にサービス提供を行うというだけのもではなく、自らの話題提供、市民との交流を通じて私たち自身も育てられていく、そんな活動であると思います。それは、私が経験して感じたことです。

## 国際協力の想い出

鹿児島大学理学部 根建心具

最近、NASAやオーストラリアの研究機関と学術交流協定を結んで、地球外生命探査のためにオーストラリアで太古の地層を掘削している。それを紹介するつもりで書き始めたが、書いてみると昔JICAで考えたこととちっとも変わっていない。そこで思い切って私の昔を紹介することにした。30年近く前の冴えない話をお許しいただきたい。

当時、外貨獲得を鉱産資源に100%頼っていたボリヴィアからの「資源開発の基礎である鉱床学(資源がどうしてできるかを研究する分野)を学ぶ研究所を造ってほしい」との要請に応え、JICA

はその可能性を探るために小規模な技術援助をスタートさせた。

「外国は日本が見える鏡」とよく言われる。異文化交流の醍醐味である。ボリヴィアに赴任して最初に驚いたのはプレートテクトニクスについてであった。大陸が動くという考えを改良したこの理論を、ボリヴィアの鉱床学の教授も学生もよく口にしていた。30年前と言えばこの理論はまだ真新しく、私の専門からはほど遠い講座(研究室)の研究テーマで、興味があったが私にはやれないと思っていた。日本の大学の講座の間には研究に関する不可侵条約みたいなものが漂っていたから

である。最初に現れた「鏡」には、日本の教育研究体制の閉鎖性がありありと写った。

こんな訳で、当初鉱床学の基礎を教える予定だったがこの国では陳腐すぎると考え、それまで学会で発表した内容を講義し始めた。しばらくして待望の野外調査に出かけることになった。太平洋のプレートが南アメリカ大陸の下に沈み込んでゆき、アンデス山脈とその中に資源ができて行く様子は壮大である。この国の人も滔々とその形成発達史を説明してくれた。大いに堪能したが、ちょっと違和感があった。この国の人はハンマーを使わないのである。ハンマーは風化した石の表面を除いて、中に残っている新鮮な石から地球の歴史を読み取る道具である。特に資源形成は地球の化学的現象であるから、新鮮な石の観察を省いてはプロジェクトも研究所もない。誘ったがあまり乗ってこなかった。それからまたしばらくして、今度は鉱山に行くことになった。車で2時間。私を紹介するために必要と言うので、少し詳しく研究内容を話した。途中間違えて説明した部分があったが、車の中だし仔細な部分だし、それにまもなく到着しそうなので、大学に戻って修正するつもりだった。カウンターパートはよく記憶していて、鉱山技術者の前で私の説明を見事に再現した。その見事さは大したもの間違いまでそっくり再現した。

欧米の研究者はアンデス山脈などに出かけ、プレートテクトニクス理論を構築していた。長年アンデス山脈に住みアンデス山脈を知り尽くしている現地の人たちは、この理論を、現場から評価・批判できるはずである。私の質問に、欧米のような高価な実験装置がないためそれができないのだと言う。まあ、そのために私が派遣されているのだからわからないことはないけど、それに代ってハンマーを使い綿密に山を歩くだけでも相当な貢献ができる。そもそも、それがなくては日本の技術援助も猫に小判になってしまう。こう主張していたら、また「鏡」が登場した。他にもない、これは私が指摘されるべきことなのだ。日本ではハンマーを使うし、実験装置だって多少ましかも知れない。しかし、ましな分だけ欧米追従が見えにくい。記憶力は遥かに及ばない。「鏡」は昔から言われている日本人の猿真似の「実際」をまざまざと映し出した。私の国際協力だって欧米の物まねじゃないのかと思った。

ともあれ、これがあって講義をやめてしまった。かわって野外調査をしながら話すことにした。それがまたたいへんで、地質調査に慣れない大学の先生には、私の行動は私自身のためにやっているとしたか写らなかったようである。ある日消灯の後、新しく加わった先生達がスペイン語で「日本のやっていることは結局、新新植民地主義だ。金で我々をだまし、この国を侵略している」と話していた。悪口はよく耳に入ると言うが、スペイン語をしゃべれなかった私にもここだけははっきりわかった。「俺は違う」と叫んだら皆びっくりした。「スペイン語を知らない嘘をついた」とだけ驚いている。激怒して、そのまま夜中に3時間車を飛ばして大学に帰ってしまった。私には落ち度があった。目線である。彼らと同じ気持ちになって野外調査をしていなかったのだ。だけど生い立ちや文化や興味・関心が違う国の人と同じ目線で作業するにはどうすればよいのだろう。この隔たりを埋めることは大変難しい。少なくとも、教えてやろう援助してやろうなんて考えは邪魔なのである。

日本には「和を持って尊しと為す」という体質がある。相手の大学と話して大方よかろうと思いき、大使館やJICA事務所のまったく違う意見にそういうものかと立ち往生してしまう。優柔不断の自分が情けない。「自由なぶつかり合いをしながら他人とも協調する」をよしとしながら、いつしか「最後は相手と協調するつもりだから、それまでは遠慮しない」に変わっていた。

クーデターの度に総入れ替えになる大学スタッフに、また一からやり直しと憤然とした。日本の国際協力の原点は「人づくり」にあるのだから、私を選んだ前のカウンターパートを更迭するなら私も帰国させろ、と陸軍本部の首脳会議でわめいた（更迭解除まで一年）。多忙な大使に長文の論文を送って未熟な国際協力論を押し付け、日本にまで持参してもらった。日本から来たJICAの調査団に理解してもらいたくて、宿泊しているホテルのロビーで3日3晩待機した（結果的には缶詰。数年後、定年になられたその部長は「あの時は参った」の一言を言うために、わざわざ鹿児島までやって来られた）。ボリヴィアの人も困ったろうが、大使館やJICAにも大変な失礼を繰り返した。未熟というよりバカというべきで、しばらく、とても口に出せなかった。今関係者や関係機関へのお詫びのために恥を披露する。やっとな先が見通せ

るようになったら、今度は日本のリーダーから計画が甘いと又えらく怒られた。修正に修正され研究所が設立された時はホッとすより何か重たいものを感じた。

国際協力の成功は経済力だけでなく文化や歴史を含めた日本の総力にかかっているように思える。国際協力の国民的コンセンサスというが、その意味は非常に深い。自分や自国を愛せない人に

他国を愛し援助することは難しいとも思う。JICAはポリヴィアのために相当出費したが、それ以上に私はたくさんのことを学ばせてもらった。帰国後しばらく他のプロジェクトにも参加したがJICAから遠のいてもう10年は経つ。最近はおそらく研究や教育面で国際交流を続けているが、同じ失敗を繰り返しているためJICAの経験が忘れられない。

## 地球市民フォーラムに参加して

三井農林海洋産業(株) 望月秀郎

山本敏晴医師の講演「本当に意味のある国際協力とは」

久しぶりにここに響く共感する話を聴いた。山本医師は国境なき医師団としてアフガニスタンおよびシエラレオネを主に60カ国において緊急医療援助をしてきた。今回の講演ではシエラレオネにおいて長年医療活動をしてきた体験について話された。シエラレオネという国はアフリカ大陸の西部にあり、高品質のダイヤモンドが産出されることで有名である。そのダイヤモンドが原因で、世界で最も命の短い貧しい国となっている。この国には16の部族があるがダイヤモンドが産出される場所は1部族だけなので、採掘権を巡って周りの部族あるいは外国との戦闘が絶えない。そのため、多くの負傷者=身体障害者が存在している。家族に身体障害者がいると、その人の介護をするために畑で作物を作ることができなくなり飢餓状態が続き、やがて病気にかかり最後は死に至る。慢性的戦争状態ゆえに兵士が不足していて、男子は6歳になると兵士にしたてられる。その方法は、モルヒネを強制的に注射し攪乱状態にさせて銃を持たせ乱射させる。その結果、多数の人々が身体障害者の仲間入りするか命を失う。また、乳幼児の死亡率が高く、死亡原因の90%が破傷風である。シエラレオネでは妊婦は地べたで出産し、大地からの精を受けるといふ迷信から臍の緒の切り口を地面になすりつけるために破傷風に感染する。この状況が長年続いているため、国民の平均寿命は34歳という世界で最も短命なのである。先進国から医療援助のため医師を半年から2年派遣してもその間にほんの一部の人しか助けられない

ばかりか医師が帰国してしまえば元の状態に戻ってしまう。山本医師は、「この状況を改善するためにはどうしたらいいのか」と自問し続けた後「現地にいる医療スタッフを徹底的に教育し、自分と同じレベルの医療が出来るまでに育て上げれば、彼らはその国ですべて医療を続けてくれる。そして将来、多くの人々を救ってくれるに違いない。」と思い、相手国の言葉を覚え、相手の歴史や文化を理解した一方的な押し付けにならない国際医療援助活動を実践してきている。そして、「本当に意味のある国際協力を実現するためには、①政治の安定 ②経済援助 ③義務教育の普及 ④医療と公衆衛生の改善 ⑤環境問題への配慮、という五つの項目を全て同時に考えていかねばならない。」と結んだ。

私の会社からアフリカのマラウイという全く資源のない大変貧しい国にJICA専門家として派遣されている社員がいる。彼の報告書によるとマラウイは国民の半分がエイズ感染者であり、このままでは20年後に人口が三分の一に激減するであろうといわれている。この国で最大の問題は食糧不足である。もともと人々は、収量は少ないが環境に強いトウモロコシを栽培していた。しかし欧米人が技術協力の名のもとに殺虫剤と化学肥料を使用した収量の多いトウモロコシに植え替えさせた。ところが次第に土地が痩せていき、干ばつに弱いこのトウモロコシは育たなくなってしまった。人々は元の強いトウモロコシに植え替えたが、すでに痩せ細った土地では育たなくなっていた。これが食糧不足の原因であり、エイズに対する抵抗力がなくなって死亡率が年々上昇している

そうである。しかしシエラレオネのような戦争はなく、とても平和で貧しくとも幸せだと感じることである。マラウイに間違っただけのトウモロコシを技術供与しなければ、とても良い国だったのかもしれない。ダイヤモンドがあるがために国がメチャメチャになってしまったシエラレオネと何にも資源がないが平和な国マラウイと同じ貧しいなら後者の方が国民にとっては幸せなのではないだろうか。ここでも押し付けの国際協力の失敗を垣間見たような気がした。

私は水産養殖のJICA専門家としてフィリピン、インドネシア、アルゼンティンへ派遣されたことがあり、また、民間ベースの技術協力として20数カ国で水産養殖の仕事をしてきた。そしていつも国際技術協力において山本医師と同じような疑問を感じていた。あるJICAプロジェクトにおいて高価な機材を無償供与し、専門家が2年から5年の間、相手国の人々に技術指導してある程度の成果が得られたとする。しかし「自分は専門家としてよくやったな」と自己満足して帰国した後、そのプロジェクトを管理・運営するスタッフも予算もなく元の状態に戻ってしまい、高価な供与機材は故障しても修理ができず錆び付いてほこりを被ることになってしまった。「真の技術協力」とは、供与された技術を相手国の人々が完全に習得し、専門家が帰国した後もその技術が継続して受け継がれ普及されることだと思う。そのためには、先進国の文明を押し付けないように、現地の言葉を習得し、相手国の歴史・文化・習慣を尊重して、それらにあった同じ目線の上で相互に協力しあっているかねばならないのではないだろうか。ある看護師の協力隊OGから、「インフラの悪い現地の病院へ使用できない最新式の高価な医療機器を無償

供与しても何の役にも立たない。それよりも救急医薬品や包帯などを送ってくれたほうがどんなに利用価値があるかしかない。」と聞いたことがある。税金が減少して国債に頼る国家予算を考えれば、商社とコンサルタント会社だけが儲かるようなODAの仕組みは考え直すべきではないかと思う。

私の会社は、昨年末、津波で20万人以上の人命が失われたスマトラ大地震の発生地アチェで3年間エビ養殖の技術指導をインドネシアの民間会社に行なったことがある。私も社員を技術支援するために3回アチェのエビ養殖場を訪問し、ブラックタイガーの種苗生産（親エビを人工的に産卵させて稚エビまで育てること）を行なった。そのエビ養殖場は、台湾技術者が請負契約で種苗生産していたため、技術者が帰国した後は、全く稚エビが出来ない状態に陥ってしまっていた。私の会社に種苗生産技術の依頼が無い込み、3年契約でスマトラ島のアチェ州へ社員を派遣することになった。3年間で全てのエビ種苗生産の技術を相手会社の社員に伝授し、帰国した。そのとき、まだ技術指導料の売掛金が600万円残っていたが、もう貰えないものと諦めていた。しかしながら、相手会社の社員だけで稚エビを大量に生産し、現地で販売できたとのことで600万円を送金してきた。開発途上国で仕事をして、帰国後に売掛金の入金があった唯一の出来事でした。これも派遣された社員がインドネシア語を習得しながら現地会社の社員と同じ目線に立って押し付けでない技術指導を行なった結果だと感激した。そのエビ養殖場は、今回の地震の震源地とは反対側に位置していたためにほとんど被害がなかったのは幸いでした。

## 平成15年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会報告

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 幹事 北 香理

平成16年3月6日(土)午後4時より、鹿児島市の「敬天閣」において平成15年度鹿児島県JICA派遣専門家連絡会総会が開催されました。参加者は会員16名、来賓1名でした。

まずはじめに、野田会長より挨拶がありました。その中で、1)当総会は例年金曜日に開催していた

が、今回は試験的に土曜日に開催してみようということになったこと、2)今回は残念ながらJICA関係者が他のイベントのため出席できないこと、の2点について説明がありました。つづいて、平成15年度活動報告として、a. NEWSLETTER NO.3の発行、b. 会員名簿の整備、c. 活動報告冊子の

作成, d. 会員の経験を活用してもらうための資料作成, e. 会員への九州ネットの送付, f. その他(会計報告他), について各担当者より報告がありました。今回はとくに、「会員の経験を活用してもらうための資料作成」事業として『JICA 専門家経験者の講師派遣や執筆のご要望にお応えします!』と題したパンフレットの初版発行に向け、総会の時点で初版完成直前のサンプル版が配布され、講師派遣や執筆に協力していただける会員の方へ掲載内容の最終確認が要請されました。このパンフレットは平成15年度中に初版が発行され、本稿執筆時点ですでに運用が開始されています。

そのあと議事として、役員の変更が行われました。今回は会長が交替することになり、新しく鹿児島大学理学部地球環境科学科の市川敏弘新会長が選出されました。幹事についても新役員を募りましたが立候補が無く、現任者がそのまま引き続き任にあたることになりました。続いて市川次期会長より新任の挨拶があり、さらに平成16年度の活動計画案について「基本的にはこれまでの役員が引いた線に乗っ取って進めていきたい」との発言があり、承認されました。最後に野田会長より



1) 来年度(平成16年度)以降の当連絡会事務局については、大学内のスペースや人員体制などの都合により、次期会長とも相談し、引き続き多島園研究センターに置くことになったこと、2) 国際協力推進員の立場について、当連絡会の雑用などの負担をさせないようによく注意すること、の2点についてお話がありました。

総会終了後、続いてGregory N. NISHIHARA氏による講演がありました。「Interaction with the local community: a foreign students' point of view」と題した講演では、当連絡会が今後実施しようとしている講師派遣事業などの参考にするために、NISHIHARA氏が留学生会会長として地元の小中学校などに赴いたときの経験などを話していただきました。

講演後の意見交換の中で、会員より「懇親会は配偶者同伴にしてはどうか」という意見が出されましたが、このことは以前から役員会でも検討されており、来年度は実施が約束されました。

尚、総会の内容については「総会概要」が各会員に配布されており、NISHIHARA氏の講演要旨についてはNEWSLETTER NO.3に掲載されていますので、ご参照ください。



現在の鹿児島県JICA派遣専門家連絡会役員は下記のとおりです。

顧問	笠原秀昭	独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長
会長	市川敏弘	鹿児島大学理学部
幹事	大富 潤	鹿児島大学水産学部
幹事	北 香理	Festa TD代表・国分メンタルクリニック副院長
幹事	児玉憲雄	
幹事	志賀美英	鹿児島大学法文学部

# 鹿児島県 J I C A 派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成15年 2月28日)

## 1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請,九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化,国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日,開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は,持てる知識・エネルギー等を結集して,前記の動向の有効な発展に資すると共に,県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して,本会をここに結成する。

## 2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため,下記に係わる事業を行う。

- (1)政府開発援助 (ODA) 進展動向に関する調査研究及び提言
- (2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言,支援等
- (3)鹿児島県と海外諸国(特に開発途上国)との国際交流活動の促進,充実に資する諸活動
- (4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

## 3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお,今後帰国し,当会に入会を希望する専門家は,当会に入会届を提出するものとする。

## 4. 会長及び幹事

- (1)会の運営を円滑に行うため,当会に会長1名および世話役として幹事4名を置く。
- (2)会長は会務を総括し,会を代表する。
- (3)幹事は適宜幹事会を開いて,所要の協議・決定を行い,会員の協力を得て,第2項に定める会務の執行に当る。
- (4)会長及び幹事の任期は2年とする。但し,再任は妨げない。
- (5)本会に顧問として,JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。
- (6)本会に臨時会計役を定め,所定の会計処理をおこなう。

## 5. その他

この申し合わせ事項を改変,もしくは新たに会則を設ける場合,幹事会が原案を策定し,会員の過半数の同意(集会又は郵送による)を得て施行する。

## 編集後記

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報第4号をお届けいたします。

今年度は中学と高校に計3件講師派遣を実行し私達の経験を伝えることができました。会員の皆様,実行委員としてあるいは派遣講師としてこの事業に参加してみませんか。また,皆様からの投稿をお待ちしています。会報にふさわしいものであれば内容は制限しません。本文800~1000字程度,メール,ファックス等でお送り下さい。

(事務局)

### 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報 第4号

発行 2005年2月

発行者 鹿児島県JICA派遣専門家連絡会 会長 市川敏弘

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-35 鹿児島大学理学部

電話:099-285-8170(直通) Fax:099-259-4720

E-mail: ichikawa@sci.kagoshima-u.ac.jp